

北陸大学ライブラリーセンター報

Bulletin NO.30

⇒ をクリックすると本文がご覧になれます。

⇒ 図書館を毎日利用しよう！

小南 浩一
(教育能力開発センター准教授)

⇒ 第10回 北陸大学読書感想文コンクール 入賞者を表彰

⇒ 《最優秀賞》
「最期の自由」とはなにか

東 佳奈枝
(薬学部 薬学科 1年次生)

⇒ 《優秀賞》
「約束」

三村 唯
(薬学部 薬学科 2年次生)

⇒ 《優秀賞》
『レンブラントの帽子』を読んで

森永 光
(薬学部 薬学科 2年次生)

⇒ 《優秀賞》
『西の魔女が死んだ』を読んで

宮森 禄子
(薬学部 薬学科 3年次生)

⇒ 《優秀賞》
孤独の物語を語る人同士 — 『村上春樹のなかの中国』を読んで

黄 曉 玲
(未来創造学部 未来文化創造学科 4年次生)

⇒ 読書感想文コンクールによせて

⇒ 審査委員から一言

⇒ 目次

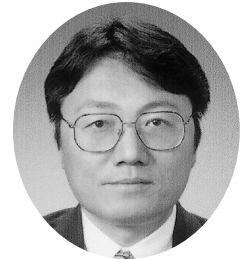


北陸大学ライブラリーセンター報



図書館を毎日利用しよう！

教育能力開発センター准教授 小南 浩一



図書館と食堂は毎日利用しよう。もし、あなたが大学の図書館にあまり足を運んでいないとしたら、大変もったいないと思います。図書館は書籍、新聞、雑誌だけではなく、パソコン、DVDなどの視聴覚教材等、みなさんの知的欲求を満たす資料の宝庫で、みなさんが利用すればするだけそれに応えてくれるはずです。

さて、図書館に入ればすぐ新聞のコーナーがあります。三大新聞をはじめとする日本の新聞の他に英字新聞や中国の新聞もあります。みなさんにはぜひこれらの新聞を毎日読んで欲しいと思います。もちろん、インターネットで様々な記事を検索できますが、紙面を大きく広げて、政治、経済、社会、文化、スポーツ等々の記事を眺めて下さい。自分の関心や興味のあることだけではなく、今、世の中で起きていることが目にとびこんでくるはずです。また社説などを比較して、各新聞の主張の違いを探すのも面白いでしょう。

新聞コーナーのとなりには『文藝春秋』『中央公論』『世界』などの月刊誌が置かれています。これらの月刊誌は毎号特集が組まれていますので、この特集を読むだけでも、現在、何が問題とされているかがわかります。また、こうした月刊誌は新聞のような即時性がない代わりに、問題の本質や意味を深く考察した記事がありますので、新聞と同時に読むといいと思います。多様な意見にふれ、自分の考えを深めることができ、それは就活にも役立ちます。

図書館の2階、3階には一般書や専門書の他に、いわゆる学術雑誌と呼ばれる専門雑誌があります。みなさんが3年次生になって自分の専攻が決まれば、こうした学術雑誌も手にとって、学問の最前線何が論じられているのかを調べて欲しいと思います。卒業論文のテーマを考えたり、実際に卒業論文を書くときにこうした学術雑誌を利用して下さい。

4階には世界や日本の文学全集の他に、作家や思想家の全集があります。一人の小説家なり思想家なりの全作品に挑戦するのも学生時代の読書の特権（方法）です。そしてみなさんには、人類の知的遺産に貢献し長い年月をかけて世界中で読み継がれてきた古典にぜひ挑戦してもらいたいと思います。また、同じ4階には「未名文庫」があって、中国の歴史や思想に関する書籍が中国語の原典とともに数多くあり、大変貴重なコレクションとなっています。本学には孔子学院もあり、中国語や文化の学びを勧めていますので、中国人留学生のみなさんだけでなく、中国語を専攻する日本の学生も「未名文庫」をのぞいてほしいと思います。

大学の図書館は本を読むだけでなく、レポートを作成したり、試験勉強をする場でもあります。よく食堂で勉強している学生をみかけますが、重厚な書籍に囲まれて「古典の森」のなかでする「学問」も

いいものです。また、4階の窓からのフットボールパークや医王山の眺めも捨てがたい魅力です。調べたい本や資料が見つからないときなどは、カウンターや図書館の職員があなたたちの手助けをしてくれるでしょう。





みなさんには毎日図書館に来て、図書館に自分の専用席があるような学生生活をおくってほしいと思います。


第10回 北陸大学読書感想文コンクール 入賞者を表彰

北陸大学では、毎年読書感想文コンクールを実施しており、今年度で10回目となりました。本学では、「人間性」の涵養を重視し、健康で感性豊かな人間の育成のため、「読書、運動、芸術」に力を入れています。

そのような観点も踏まえ実施された本コンクールにおいて、今回は415編の応募があり、入賞作品を選出・表彰しました。

入賞作品

<p> 最優秀賞 「最期の自由」とはなにか</p>	<p>東 佳奈枝 (薬) 1年</p>
<p> 優秀賞 「約束」 『レンブラントの帽子』を読んで 『西の魔女が死んだ』を読んで 孤独の物語を語る人同士</p>	<p>三村 唯 (薬) 2年 森永 光 (薬) 2年 宮森 禄子 (薬) 3年 黄 曉玲 (未) 4年</p>
<p> 佳作 100万回生きたねこ 一に止まると書いて正しいと読む 誰かがいてくれるということ 出会いによって生きているヒト 双子星の孤独～『キッチン』を読んで</p>	<p>川島古都乃 (薬) 2年 中島 窓香 (薬) 2年 船戸 大敬 (薬) 3年 中川 有衣 (薬) 3年 黄 贊 (未) 3年</p>
<p> 努力賞 「生きる」ということ 障害役者 病気(癌)は決してただ悪いものというわけではない 理解しがたい人物 自己を見つめるということ はたして喜助は弟思いの心やさしい兄なのか 『リーダーはじめてものがたり』を読んで 立ち止まることの大切さ 今もう一度読み返してみても 児童虐待の真実 『人間失格』を読んで 『神去なあなあ日常』を読んで 愛するということ 観る目を鍛える 現代社会における日本語</p>	<p>村中 里弥 (薬) 1年 前川 佳穂 (薬) 1年 小林多恵子 (薬) 1年 佐々木千嘉 (薬) 2年 柳瀬明日香 (薬) 2年 大野向日葵 (薬) 3年 今江 麻由 (薬) 3年 米山 一美 (薬) 3年 濱岸沙也子 (薬) 3年 橋場 菜摘 (薬) 3年 野崎 恭子 (薬) 4年 中塚 悠二 (薬) 5年 山崎友里江 (未) 2年 坂口 宏希 (未) 2年 喜多 史織 (未) 2年</p>

	『察知力』を読んで	斉藤 仁美 (未) 2年
	仮面をかぶるディズニー	陳 芳 (未) 3年
	あなたの意思が、あなたの運命を決するのだ	斉 悦 (未) 3年
	文明の衝突と21世紀の日本	藤田 晃穂 (未) 3年
	天からもらった絆	王 笑雪 (未) 4年
 審査員特別賞	薬の進化	堀田 瑞絵 (薬) 1年
	生と死について	浜谷 侑希 (薬) 1年
	『リポート』を読んで	柴田 千尋 (薬) 1年
	『博士の愛した数式』を読んで	中村 秋穂 (薬) 1年
	『現代の結核』を読んで	仲間こずえ (薬) 1年
	種まく子供たち	古谷 美紀 (薬) 2年
	違う面	伊藤 隼人 (薬) 2年
	『ナルキッソス』を読んで	石黒 方敏 (薬) 2年
	『人間失格』から学んだこと	石川 敬士 (薬) 2年
	永遠でないことの大切さ	鈴江 蘭 (薬) 2年
	過去からの問題	鈴木 寛崇 (薬) 2年
	ニンゲンらしさ	小林 朱美 (薬) 3年
	『はやぶさの大冒険』を読んで	浅井 遥 (薬) 3年
	ネガティブ→ポジティブへ	山本 裕貴 (薬) 3年
	ロシアより愛をこめて	前原 東吾 (薬) 3年
	『ちょんまげぶりん2』を読んで	谷口 真悠 (未) 1年
	『青春を山にかけて』を読んで	小松 春菜 (未) 1年
	『フィンランド豊かさのメソッド』を読んで	疋田 静香 (未) 1年
	「断る力」をつける	鄒 伊群 (未) 1年
	いのち一つひとつの誇り	八坂 美並 (未) 2年
	八日目の蟬	中西ひかる (未) 2年
	関係の成長	田辺 治香 (未) 2年
	color=生きる意味	辰口 有紗 (未) 3年
	若さに贈る	李 蕾 (未) 3年
	それでも僕の世界が続く	楊 希 (未) 3年
	「学び方」のほうが重要	蔣 涛 (未) 3年
	『紅樓夢』の愛情観	燕 潔 (未) 3年
	自分の王様	于 婷 (未) 3年
	『音楽の世界史』を読んで	原田 幸一 (未) 3年
	日本語の擬音語の存在意義	諸 芸穎 (未) 4年
	静かな叫び声、痛い麻痺	王 怡 (未) 4年
 ベスト・タイトル賞	color=生きる意味 [『カラフル』を読んだ感想文]	辰口 有紗 (未) 3年
	静かな叫び声、痛い麻痺[『蛇にピアス』を読んだ感想文]	王 怡 (未) 4年
 継続は力なり賞 (3年連続提出者)		西尾 拓朗 (薬) 3年
		橋場 菜摘 (薬) 3年
		樋口 雅人 (薬) 3年
		小野 麻衣 (未) 3年

* (薬) は薬学部、(未) は未来創造学部です。

* 今回の読書感想文コンクール応募者の皆さんが読んだ本は、ライブラリーセンター本館1階の読書コーナーに別置してあります。

最優秀賞

「最期の自由」とはなにか

薬学部 薬学科 1年次生 東 佳奈枝



書名 安楽死のできる国

著者 三井 美奈

出版社 新潮社

オランダでは、大麻・売春・同性結婚のみならず、世界初の合法的安楽死が実現されています。安楽死は、回復が見込めない患者にとり当然かつ正当な権利となっていますが、末期患者の尊厳を守り、苦痛から解放しようとするその選択肢にはいろいろな問題を含んでいます。『安楽死のできる国』では、その現実と安楽死の法律ができるまでの歴史などを綴っています。

日本では安楽死は認められていません。しかし、オランダでは末期患者が安楽死を希望しているという意思が明瞭な場合だけではなく、痴呆患者も、未成年も、そして新生児にすら行っています。私は驚愕しました。自分の思いをしっかりと考え、人に伝えることのできる年齢の人が安楽死するのは理解できます。しかし、生まれたばかりの新生児はたとえどんなにひどい障害におかされていたとしても、その命をほかの人が決断を下し殺すというのは納得ができませんでした。そして、何より新生児の安楽死を決定するのはその命を産み落としたその子の両親、肉親なのです。それを考えると何とも言えない気持ちになりました。

オランダでは安楽死をする場合、医師が患者に直接致死量の薬を投与するか、致死量の薬の入ったシュークリームなどを患者に手渡すらしいです。私は医薬分業が進む日本社会において、もし今安楽死が法的に認められてしまった場合、致死量の睡眠薬などを医師、または患者に手渡す、調剤する時のことを考えるととても怖く思いました。薬剤師とは人を助ける仕事だと思います。そして、決して私は今人を殺すために薬の勉強をしているわけではありません。そのことを考えると安楽死を行う医師もこのような葛藤と戦っているのかと感じました。

私はこの本を読み、医療とはどういうものかを考えさせられました。現代日本は世界一の長寿国であり、医療水準も世界最高レベルにあります。昔では考えられないような病気が治せるようになり、新しい命を産むのも母子ともに安全になりました。そこまで日本で発達している医療とはどのようなもののでしょうか。私は改めて医療とは何かを自分に問いかけてみました。医療とは、人の生命を救うものであり、また患者の苦痛を和らげその苦痛から救うものであると思います。しかし、安楽死の場合はそれが当てはまらなと感じます。もし、目の前にもう確実に病気は治らず、治療に伴う痛みなどで苦しんでいる人が「もう死にたい。殺してくれ。」といった時、薬剤師になろうという私はどのようなことを考えればいいのでしょうか。医療は患者の苦痛を和らげるのものであると私は思うとともに、薬剤師も医療人の一員としてそれに協力しなければならないと思います。しかし、患者の生命を救うこと、それも医療人の役割だと思います。患者は命を長らえる治療によって死にたいと思うほど苦しんでいます。そんな患者を見て私はどうすればいいのでしょうか。また、どのようにするのが正しいのでしょうか。

私はこれから医療人の一員になるにあたり、安楽死のほかに脳死など様々な問題を考えていかななくてはならなくなると思います。そして、今まで医療人になる立場としての自分の意見を書きました。しかし、この安楽死の問題などは一般人であってもこれからしっかりと考えていかななくてはならないことだと思いました。この問題は外国だけの話ではなく、日本でも実際に起きていることであり、多くの国民が安楽死について反対はしていないと思います。実際50年、60年後私も安楽死を望む時が来るかもしれません。最期のときは皆遅かれ早かれ訪れるのです。「尊厳死」「最期の自由」そう言われている安楽死。この問題は私たちに人間としての生とは何か、死とはどういうものかをひしひしと問いかけてく

るものだと思います。そして、私たちはどう生まれ、どう生き、そしてどう死ぬのか、それを改めて考えさせていくものであり、考えていかなくてはならないものであると思いました。

最優秀賞を受賞して

東 佳奈枝

今回このような賞をいただきとても驚き、またとても感謝しています。正直本を読むことは得意ではなく、今回の本を読みあげるのもとても時間がかかり、それを読んで感じたことを文章にするのにも時間がかかりました。人間の「死」というものについて考えるのはとてもつらく思うこともありましたが、しかし、人には必ずそれが訪れ、それと向かい合う瞬間がきます。今回この本を読み、そのことについて真剣に考えることができました。

たった一冊の本の中にはたくさんのことが詰め込まれています。これからも本を読むことによって、本の中に詰め込まれていることに会っていきたいと思います。

優秀賞

「約束」

薬学部 薬学科 2年次生 三村 唯

書名 約束

著者 石田 衣良

出版社 角川文庫



あなたには、忘れる事の出来ない「約束」がありますか？

この本は一度どん底まで落ちていった人間が苦しみから立ち上がり、上を向いて歩き始める美しい姿を描いた七つの作品が収録されています。そして苦しみから立ち上がった人間が誓った大切な「約束」がそれぞれ記されています。私はこの本を全て読み終えたときには素直に感動してしまい、そして自分自身の気持ちに置き換えることで次々と涙が溢れました。たくさん涙した後には、明日も胸を張って生きていこうと暖かい勇気も湧いてきました。

私が読んだ七つの作品の中で最も心に残った作品を紹介します。その作品は題名にもある通り「約束」という物語です。あらすじは、小学4年生のカンタは、成績優秀でスポーツ万能の親友ヨウジのようになりたいと思っていた。ある日二人は下校中にナイフで無差別に人を切りつける通り魔に出会ってしまい、カンタの目の前でヨウジは通り魔に殺されてしまった。カンタは本来生きていなければならなかったのはヨウジであり、自分が死ぬべきではなかったのだろうか・・・と自分自身を責め続けるという物語です。そしてクライマックスにはカンタは自ら死ぬ場所を考え、辿り着いた場所はヨウジが最後を迎えた場所であり、その場所に着いた時、死んだはずのヨウジが突然カンタの前に現れ「僕のために生きてほしい」と告げ、カンタは「分かったよ」と生きる約束をします。

この作品は著者があとがきで2001年に起きた附属池田小事件をもとに作られた作品だと書かれています。この事件は刃物を持った男が小学校に押し入り次々と児童や教諭を刺し、8名の児童が亡くなり15名の児童と教諭が負傷した事件で、この事件のエールとして書かれたとあとがきにありました。この事件も忘れることの出来ない、忘れてはいけない事件だと思います。しかし私はこの物語が1番強く心に刺さった理由は著者のようにこの事件を思い出したからではなく、私も中学3年生の秋、カンタと同じように親友を亡くした経験があるからです。カンタがヨウジと大切な約束を交わした時の気持ちは、理解できました。

まるであの時の私と同じような気持ちです。きっとヨウジがカンタの前に現れた時のカンタの大切な約束は今度、一生守られてゆくのだと思います。カンタはこれから先いくつもの困難にぶちあたるとあると思うけれど、ヨウジとの大切な約束を忘れることなく前に進んでいける強い心を持ったのだと思いました。ヨウジが突然カンタの前に現れてはなつた言葉一つ一つ、私も親友から言われているのだと感ずることが出来ました。私が親友を思いながら新しい風景を見れば彼女もそれを見ることが出来る、私が最後の最後まで人生をまっとうすることが出来たのなら彼女も精一杯生き抜くことが出来るのだと思います。5年前、彼女を失った時はカンタと同じようになぜ自分ではないのか？なぜ彼女だったのか？と問い詰めたことが何度もありました。しかし、今まで私の前に彼女が現れるという事はないけれど、この本を読み終えて彼女の気持ちが伝わった気がします。彼女がこの本と私を出会わせて、伝えてくれたのかなと思いました。そう思った瞬間また私の頬に涙が流れました。それと同時にまた明日から新たに彼女と生きていけるのだと実感しました。

人は何か辛くなって逃げ出さなくなった時に「生きている意味ってなんだろう・・・」と自らに問いかけます。しかし亡くなった方のことを考えると「生きていけるだけで素晴らしいな」と思うことが出来ます。この本は普段忘れかけてしまっている「生きている」という幸せを改めて思い出させてくれる作品であり、何か大切な自分にとってかけがえのないものを失って時が止まってしまったとしても再び流れ出す時がくる、そんな事を教えてくれる作品なのだと思います。明日をどのように生きようか迷っている人や大切なものを失ったことのある人に是非読んでほしいと思う作品です。

「約束」それは相手とするものではなく、自分自身に誓うもの。

私にとって忘れる事の出来ない「約束」は5年前のあの日の約束です。「どんな時も上を向いて最後まで胸を張って生き抜くこと」、これは私だけでなく彼女の一生の願いでもあるはずで。そしてこの「約束」が達成された時、初めて私と彼女は親友ではなく心で通じ合う「心友」になれるのだと思います。

優秀賞を受賞して

三村 唯

今回、優秀賞という素晴らしい賞をいただけてとても嬉しいです。賞の報告を受けた時は信じられない気持ちでいっぱいでした。自分の気持ちを文字にして人に伝える事は昔から好きでしたが、今回の感想文は少ない時間の中でまとめたものなのできちんと相手に伝わるのか不安でした。それでも自分の書いた作品が認められたことですごく自信になりました。選んで下さった方々に感謝したいです。今後も今回の賞を自分の糧としてたくさんの本を読み、本の素晴らしさを多くの人に伝えていきたいです。本当にありがとうございました。

優 秀 賞

『レンブラントの帽子』を読んで

薬学部 薬学科 2年次生 森永 光

- 書名 レンブラントの帽子
- 著者 バーナード・マラマッド
- 出版社 集英社



物語は、美術学校講師のアーキンが同僚の彫刻家ルービンの被っていた白い帽子を、「レンブラントの自画像に描かれた帽子に似ている」と誉め、それ以降ルービンがアーキンを避けるような態度をとるところ

から始まります。アーキンには何故ルービンが憤慨したのか分からず、思いがけない彼の態度に思い悩む日々が続きます。アーキンにとっては、彼の帽子を誉めただけなのに、なぜルービンが憤ったのか、むしろ誉められたことに対して気分が良くなっていいものなのに、ルービンの心理が全く理解できません。

最初の場面を読んだだけでは何を伝えたいのかよく分からないこの作品が、単なる下らない同僚の喧嘩話だと終わらせることができないのは、誰もが身に覚えがあるような他者との葛藤や、感じたことのあるような、他者の心理が理解できなくなる感覚を思い起こさせるからではないかと思います。アーキンの様に、悪気はなくとも相手を傷つけてしまったり、ルービンの様に、無神経な相手の言葉や態度に反感を覚えたり、多くの人が出会ったことのあるであろう、そういった時に味わった自分の気持ちが、読んでいくうちに自然と蘇ってくるのです。私は、アーキンがルービンから避けられる理由を必死に模索する様子に、以前に経験した友人との行き違いを思い出し、胸が痛むのを感じました。何故彼女が自分と距離を置こうとするのか、何故自分に心を許してくれないのか、悩み、時には腹が立つ思いをすることもありました。そんな当時の自分が、アーキンと重なるようで、読む手がどんどん進んでいきました。

ルービンとの会話がなくても、アーキンは彼と不仲になる以前のことを振り返ったり、自分が彼に何をしたのか考えを巡らせたりしていくうちに、芸術家としてのルービンの孤独な心を見つけていきます。そして、自分自身に問いかけるのです。「かりにルービンが自分であり、自分がルービンだと（中略）仮定してみたらどうだろうか」。そうすると、すでに初老に達しながら芸術家として花開くこともなく地味に作品づくりを続ける自分と偉大な画家レンブラントを並べられたことで、自分の才能のなさやら、生き方やらについてつい比較して落胆させられる、ルービンの悲しい胸の内が明らかとなっていきました。

相手の身になって考え、そして受け入れる。それは簡単なこと、人と交わっていく上で当たり前のことだと思われがちですが、実際にできるかと言われれば、難しいことが多いように思います。自分には非がないと思っているうちは、相手の心は見えていないのです。アーキンが「レンブラントの帽子」に似ていると思っていた帽子が、実は全くそうではなかったことに気が付いた、つまり、「レンブラントの帽子」に似ていないのに似ていると言ってしまった、という自分の間違いに気が付いて初めて、アーキンはルービンの心の内を想像することができ、憤慨した彼の気持ちを受け入れることができるようになりました。当時の私も、友人が自分と距離を置いて、心を開いてくれないことに納得できずに悩んでいながら、自分は悪くない、私は正しいことをしている、と心のどこかで思い、友人を理解し、受け入れようとする姿勢が足りなかったから、彼女の気持ちが分からなくなっていたのかもかもしれません。ルービンの本当の思いを知り、無事に和解することのできたアーキンを見てそう思いました。

些細な擦れ違いに思い煩うアーキンとルービンの姿は、正しく、対人関係に神経質になりがちな私達現代人をそのまま表していると言えるのではないかと思います。そして同時に、擦れ違いながらも相手を思い遣る互いの姿は、そんな悩める私達の胸を打ち、他者との良い関係を保つヒントを与えてくれるような力を持っています。この作品は、私が他人との関係で悩んだり、自分自身や他人が分からなくなった時、これからずっと私の支えになってくれると信じています。

優秀賞を受賞して

森永 光

優秀賞という光栄な賞を頂き嬉しく思うと同時に、選んでいただいたことに大変感謝しています。感想文を書くにあたり普段は読まないような本に挑戦したり、今回の機会がなければ知り得なかった作品にたくさん出会うことができました。『レンブラントの帽子』も初めての作品でした。最初は作品の面白さが分からなかったのですが、繰り返し読むうちに初めは分からなかった作者の真意が見えてきたり、自分の経験と重なる部分を発見できたりし、文字を追うだけでなく考えながら読む楽しさを知ることができました。今後も様々な本を通して自分の世界を広げていきたいです。

優秀賞

『西の魔女が死んだ』を読んで

薬学部 薬学科 3年次生 宮森 禄子



書名 西の魔女が死んだ

著者 梨木 香歩

出版社 新潮文庫

「西の魔女が死んだ。」、中学生のまいに、突然の知らせが入った。母が学校に迎えに来て、西の魔女と母方の祖母の家に向かっている間、まいは中学に進んで間もなくのことを思い出した。学校になじめなかった彼女は、季節が初夏へと移り変わる約一月を西の魔女のもとで過した。ひよんなことから自然に囲まれる祖母の家で魔女の手ほどきを受けることになったが、魔女になるには意思をもつ、自分で物事を決める、決めた事をやり遂げる、そんな何でも自分でやるのが肝心だった。

毎朝決められた時間に起き、寝る事、そんな些細な事簡単だろうと思うかもしれないが、果たしてそうだろうか。「まいは、そんな簡単なことっていいですけど、そういう簡単なことが、まいにとっては一番難しいことではないかしら」。作中で祖母が言っているように、頭では簡単だと思っけていても、実際にやり遂げるのはとても難しい。例えば長期休みに入れば寝る時間もばらばらになるし、予定のない休日なんかは遅くまで寝てしまいがちになる。自分で決めた事をやり通す意志の強さがなければ、なかなかできない。つまりはそういうことなのだ。

祖母は魔女修行と称して、まいに生きて行く力を教えたかったのではないだろうか。自分がそばにいても、世の中を渡っていけるように、心を強くしてやりたかったのではないだろうか。作中でまいは、始めはどこかとげとげした印象があったが、祖母と暮らすことで固くなった心が徐々に柔らかくなり、どこか優しい雰囲気を持つようになった印象をうけた。

色々な出来事を経験しながら日々は過ぎ、やがてまいはゲンジさんという祖母の近所に住むおじさんのことで祖母と喧嘩をし、心にしこりを残したまま祖母のもとを去ることになる。そしてその二年後、直接の仲直りが出来ないまま祖母は亡くなってしまい、回想は終わるのだ。久しぶりに祖母の家についたまいは、悲しみに打ちひしがれるが、そこで発見したのだ。「ニシノマジョ カラ ヒガシノマジョ ヘ オバァチャン ノ タマシイ、ダッシュツ、ダイセイコウ」。祖母がまいに向けて残した、最後のメッセージ。まいと祖母の約束であった「おばあちゃんが死んだら、まいに知らせてあげますよ。(中略) 本当に魂が身体から離れましたよって、証拠を見せるだけにしましょうね。」という言葉覚えていてくれた、それだけでまいの心はとても救われたのだと思う。この瞬間まいは祖母の愛を感じ、また自分がどれほど祖母が好きだったかを理解した。ここで『おばあちゃん、大好き』(中略)『アイ・ノウ』この合言葉のようになった2人のやり取りがとても印象的だが、祖母の言う『アイ・ノウ』という言葉はおばあちゃんはこのにいるよ、安心しなさいという祖母の愛の詰まった魔法の言葉だったのではないだろうか、と思う。

私たちは大人になるにつれ、気持ちを素直に言葉に出すことが恥ずかしくなり、照れくさくて、想っけていても相手に言葉で伝える機会が少なくなっていつている。けれどこの作品を読んで、人に気持ちを言葉で伝える事の大切さをあらためて実感させられたように思う。家族や祖父母、友達や仲間、大切な人への感謝の気持ちや好きだという気持ちを、言葉にしなくても伝わっているとか、今言わなくてもいつか言えると思っってしまう。しかし、当たり前だった毎日が明日も来るとは限らない。時には恥ずかしさ、照れくささを捨てて、素直に気持ちを伝えて行こうと思っせてくれる作品だ。

題名とは裏腹に、読み終わった後、なんだか温かい気持ちにしてくれる、心温まる一冊。親になった時、祖母になった時など、立場が変わった際にもう一度読んでみたい。きっとまた別の視点からこの作品を見る事ができるだろう。

優秀賞を受賞して

宮森 禄子

まさか入賞するとは全く思っていなかったので、受賞の知らせが入った時は喜びよりも驚きが上回っていました。しかも優秀賞だなんて、光栄です。もともと本を読むのは好きなのですが、最近では忙しくなかなかじっくり読むことが出来ずにいました。今回久しぶりにゆっくり本を読む事が出来て楽しかったです。また時間を見つけて本を読もうと思います。このような機会を与えて下さって本当にありがとうございました。

優秀賞

孤独の物語を語る人同士

— 『村上春樹のなかの中国』 を読んで

未来創造学部 未来文化創造学科 4年次生 黄 曉玲



書名 村上春樹の中の中国

著者 藤井 省三

出版社 朝日出版社

「僕が足のない鳥だ。」というセリフは香港映画になじみのある人にとって、必ず聞いたことがあるだろう。これは香港の著名な監督である王家衛が、1990年に製作した映画『欲望の翼』（阿飛正伝）のセリフだ。しかも、その年はまさしく『ノルウェイの森』により香港で起こった「村上ブーム」の翌年であり、「天安門事件」が発生した翌年でもある。

なんらかのつながりがあるだろうと思うかもしれないが、『村上春樹のなかの中国』の筆者藤井省三は「たしかにある」と教えてくれた。「天安門事件」が香港の人々にもたらしたのは「価値喪失、自我崩壊、感情消失」だけではなく、アイデンティティを考慮し直さなければならない苦境に陥らせたジレンマでもある。そのとき、村上の出現は香港の共鳴を起し、さまよう人々の共感を誘った。『ノルウェイの森』は孤独に苦しむ現代人の生き方を最大限に深めて描いたものであり、『風の歌を聴け』は希望と絶望に新たな解釈を与えたものであり、『国境の南、太陽の西』は並々ならぬ生活を追求し続ける中での、迷いを映し出すものである。香港の人々、特に若者は、村上作品から自分の影を見つけ、時間も空間も違うストーリーから同じように孤独で仕方ない、いらいらとした心情を見つけだした。『欲望の翼』はこのような孤独と痛みをアイデンティティが揺れる時代の中に入れ、絶望しようとしているところに、希望を見せるものだ。

それでは、なぜ「村上ブーム」は中国の映画にまではびこっていったのか。現代人としては、まわりにより起こされた孤独感と戸惑いがいつまでも存在し続けるからだ。村上はその痛々しく繊細な気持ちを描き切ったのだ。映画と小説はいつも微妙な関係をもっており、映画には、ある作家から受けた影響が見える。ただ、作家が描いた雰囲気と暗示は監督に借りられ、異なる主人公に移される。時間や場所、人物は同じではないものの、つくられたストーリーの地色は似ていたり、ストーリーの述べ方が近かったりする。

人生を遊びとする『欲望の翼』の主人公は、自分のアイデンティティにより現実の痛みから脱出しようとする群れから離れた鳥だ。同じく王家衛により指導された映画『2046』は生活の煩雑から逃げようとする人が、空虚な愛情を探す結果、孤独を味わってしまうストーリーだ。そして、『恋する惑星』や『いますぐ抱きしめたい』、『花様年華』などは、いずれも香港の男女の細々しい現実離れの妄想と、リアリズムを帯びて映る悲しみと淋しさを鋭く描いたものだ。

しかし、「映画の村上春樹」と呼ばれる王家衛は、村上との間に大きな違いがある。村上は常にユーモラスな口調で都市にいる男女の生活や考えを描き、主人公の孤独感は深くても読者に重さを感じさせない。そのかわり、読者に思考させる余地を残す。それと異なり、王家衛は常に薄暗いあかりを使い、主人公が無言のままタバコを吸い、ぼんやりしたりするシーンを多くするがゆえに、映画の雰囲気はきわめて重く、孤独感は骨まで入り込み、奥深い淋しさを感じさせる。とはいえ、そこには王家衛の独特な優雅さが漂っている。

村上は常に自然な流れで主人公の心を描いていて、地域と時代の印は比較的薄い。一方、文化大革命で上海から香港へ移民し、イギリスの植民地である所で、「天安門事件」によりなんらかの信念が潰された香港人の一人である王家衛は、映画では時代にふさわしく濃厚な味を体験させてくれる。

「消費社会」・「物質文明」・「鉄の森」等々、我々の居場所はこのように名付けられた。これらの裏には、見えにくい現代人の心がある。渡辺や初のような人がそばにいるかもしれないが、小説の人物に合わせるのではなく、自らの道を見出し、生活を充実する目標に辿りつくべきである。

優秀賞を受賞して

黄 曉玲

都市に住んでいる人たちは田圃に関する話を聞いてから、田圃を見に行く。内陸に住んでいる人たちはテレビで海を見かけてから、海を見に行く。女の子はラブストーリーを読んでから、愛情を知る。

私たちは有り触れた日常生活を暮らしているので、いろいろなメディアで外の世界を理解する。テレビや映画の画面は実際に体験したかのように新しい物事を味わえる。インターネットのスピードは、一瞬のうちに、知りたいことを教えてくれる。しかし、文字も独特の力を持つ。画面の組み合わせと比べ、本を通して筆者と自然な流れの中で、自由な方式でやりとりができる。文字とのコミュニケーションは純粋な楽しみだ。

読書感想文コンクールによせて

審査委員長・薬学部准教授 鍛冶 聡



本年は415編（未来創造学部295編、薬学部120編）の応募がありました。まず、一次審査を行い、未来創造学部では担任の先生方で295編から79編へ、薬学部では協力教員を含み6名で120編から58編へ絞り込ませていただきました。この137編を4名の審査員が1ヶ月かけて読み込み、最優秀賞1編、優秀賞4編、佳作5編、努力賞20編、審査員特別賞31編の計61編を選出しました。多くの力作を応募してくれた学生諸君、学生へ読書を啓蒙していただくとともに提出窓口となっていたいただいた担任の先生方、加えてコンクール実施の企画立案から表彰までを滞りなく進めていただいたライブラリーセンターの皆様へ感謝します。また、担任学生の作品を絞り込んでいただいた未来創造学部の先生方並びに薬学部の一次審査をお願いした竹井先生、高寺先生、加藤先生、松原先生にこの場を借りまして御礼申し上げます。なお、入賞作品およびその作品群につきましては、個々の審査員の先生方から熱のこもったコメントがあると思いますので、私のほうは割愛させていただきます。

さて、全学生が読書に親しみ、その感性にひびいた作品について自身が情報発信することが北陸大学の大きな目標のひとつであります。その目標達成には、まだまだどころか半ばにも達していません。しかし、10回目となった本年は1年次生から3年次生までの学生の30%が作品を応募したことは、一つの喜びとした

と思います。審査委員会に上がってきた数を比べても、平成20年度の111編から、21年度で122編、22年度の本年は137編と着実に増えています。未来創造学部ではここ3年間は常に32%以上の学生が提出しております。また、薬学部では24%と初めて20%を超えております。特筆すべきは未来創造学部の2年次生が2年連続して50%を超える提出となっていることであります。また、薬学部1年次生の42%という提出率も次年度が大いに楽しみです。取らぬ狸の皮算用ではなく、本年において前年度から引き続き応募する学生が増加したことは本当に心強い限りです。次年度も多くの作品が応募されると信じますし、大学をあげて参加を積極的に呼びかけますから、応じていただけたと思います。大事なのは、100%の学生が読み取る能力、発信する能力に長けるといことなのです。

読書感想文は書きにくいという声はよく耳にします。いうまでもなく、実際に感じたこと全てを言葉にできるかというとなかなか困難です。また、言葉の裏に潜む作者の意図など、それを読み解くのが読書の楽しみなのかもしれませんが、直接書いておいて欲しいと思う人も多いのではないのでしょうか。そもそも、薬学に限ったことではないと思いますが学術論文、報告文は客観的事実を綴ったものであり、裏にあるデータを読み取らせるといったことがあってはならないはず。「察してよ・・・」という甘えを徹底的に排除したものです。ところが、世の中すべからくそのようにとはまいません。人と人との関係なのですから。少々薬学部には話は偏りますが、薬学部の学生は、患者さんとの会話の中から背景を読み取ることも求められるような、いや、“ような”ではなく求められる時代となりました。実務実習で学生を指導していたでいる薬剤師の先生から“投薬”とはすごい言葉だねと語りかけられました。ごく当たり前に習い使ってきた言葉ですが、考えてみると何という言葉でしょうか。投げる薬？薬を投げる？誰に？また、薬を“投与”するも。薬を“投与”投げ与える？誰が？考えれば考えるほど今の医療が目指す“患者さん中心の・・・”から遠い言葉に思えます。かつてのパターナリズムのなせる技？・・・そんな時代ではないのです。服薬指導のみならず、日常会話の中から情報を読み取り、患者さんの健康のために活かすことができる薬剤師が求められます。その能力を身につけなければならないのです。どの様な手段で身につけるのでしょうか。ベッドサイドで薬の話しかできない薬剤師は患者さんにいやがられ・・・その先は？未来創造学部の学生さんはなおのこと。就職に限らず訪問した先で、「最近どの様な本を読みましたか」、「読んだことにより何を得ましたか」というような質問に答えられないでは寂しいですよ。まして、面接のさなかではもっと困りますよね。留学生の皆さんにつきましては、大変な努力を重ねていると感心します。母国語ではない言葉を読み取り、母国語ではない言葉で自身の感情を述べ、発信する。何という困難をこなしているのでしょうか。文章の一節におけるその表現技法について意見を言うことも、私自身が日本語以外でできるかという正直無理であります。その問題を克服して応募してくる学生さんは大変素晴らしいと思います。かくして、審査を分けて部門別にすべきかとも思いましたが、それは要らぬお節介で失礼というもの。今後ともコンクールのスタイルは変わらないと思いますので頑張ってください。最後に、蛇足ですが、最近ネットでよく目にする“感想”は、論評、批評、作家さんのテクニク解析で感想文とちと違うような気がします。それらはそれで、大切なことではあると思いますが、感想文とは人として読書によりどう成長したかを表すもの。時によればのめり込んで人目をはばからずに涙する。その気持ちを伝えるものが感想文と信じております。

審査委員から一言



審査委員
小林 忠雄
(未来創造学部教授
・学術資料部長)

今年度の読書感想文コンクールには数多くの応募があり、審査員としては嬉しい悲鳴であったが、その分審査も難しかった。全体にご自分の体験を通じたエピソードなどを交え素直に感じたままを書き、また自身の考えをしっかりと記述し審査員の共感を得たものが多かった。しかし、なかには高度な文芸評論のような作品もあり、このコンクールの質の高さを誇ることも出来た。読書は読む人の人格や思想形成に大きなきっかけをつくるものであり、その影響は計り知れない。ぜひとも来年度は、より多くの学生さんたちの応募を期待したいものだ。



審査委員
一ノ木 進
(教育能力開発センター
准教授)

読書感想文の審査は、初めての経験なので不安であったが、読み進むにつれてその不安は感動へと変わっていった。

留学生にとって、母国語でない言語で感想文を書くというのは、決して楽なことではなかったと思う。しかし、本から受けた感銘を素直に表現している良い作品が多くあった。ただ、日本人と同じ土俵で審査を受けるのなら、審査の前に、せめて「てにをは」くらいは直してあげればよかったのでは、と思った。

薬学部の学生の感想文は、その学生の顔が浮かんできたりして、また違った味わいがあった。というのは、部活動の練習や発表会を見に行くと、普段は見られない一面が見られることはあったが、今回は感想文を通して、心の一面を垣間見ることができたからだ。長い審査期間の間には、感想文に共感して涙腺がゆるんだこともあった。さらにその原著を読んで、感動の涙を流したこともあった。

この審査を通して、良い本をたくさん知ることができたし、多くの学生の感動を共感することができた。こうして、最初の不安な気持は、感動へ、そして最後には感謝へと変わっていった。たくさんの感想文をありがとう。



審査委員
八木 健太郎
(国際交流センター准教授)

受賞者の皆さん、おめでとう。また、惜しくも入賞しなかった人の中にも、大変な力作が数多く見られ、大いに審査員の頭を悩ませてくださったことをご報告する。

今回特に高く評価された感想文は、自分自身の思考や感情が深く、かつ明確に表現されているものだった。ありきたりの内容ではなく、自身の深遠な思考を他人にも分かるように表現することや、自身の複雑な心の動きをみずみずしい表現で描写することがどれだけ難しいことなのか、そして、それをやり遂げることにどれだけやりがいがあるのか、今回読書感想文コンクールに参加した方が、そういったことを理解してくれればと、切に願っている。

編集後記

北陸大学未来創造学部国際マネジメント学科が設置されて以来、本ライブラリーセンターでは新しい経済関係の図書が増えています。今の世界経済は、混乱と復活の渦中にありますが、これを発展へと導くのは、豊かで確かな、温かみのある教育を受けた若人たちでしょう。

(柿 木)

CONTENTS

	頁
○ 図書館を毎日利用しよう！	1
○ 第10回北陸大学読書感想文コンクール入賞者を表彰 ...	2
・ 入賞作品	2
・ 最優秀賞、優秀賞感想文	4
・ 読書感想文コンクールに寄せて	10
・ 審査委員から一言	11



北陸大学
HOKURIKU UNIVERSITY

北陸大学ライブラリーセンター報
NO.30

平成23年3月31日発行

編集・発行： 北陸大学ライブラリーセンター
〒920-1180 金沢市太陽が丘1-1
TEL. 076-229-3021
FAX 076-229-4850

ライブラリーセンターEメール： tlib@hokuriku-u.ac.jp
北陸大学ホームページ： http://www.hokuriku-u.ac.jp/

印刷： カンタ印刷株式会社